

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 短篇小説 邂逅

著者	アン ギョンジャ, キム ファンギ, 川村 湊, 守屋 貴嗣
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化. 論文編
巻	12
ページ	193-205
発行年	2011-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/6335">http://hdl.handle.net/10114/6335</a>

〈短篇小説〉

## 邂逅

アン・ギョンジャ＝作

キム・ファンギ（翻訳）、川村湊・守屋貴嗣（補訳）

コンビカ空港は閑散としていた。

鞆を投げ出すように床面に置いたウンエは、習慣的に周りを見回した。馴染みの顔などいるはずがない。簡易椅子にどかっと身を任せると、既にやることは何もなかった。やること、一体やるべきことは何だろう。ただ時間を待つこと、それだけが唯一のすべきことだった。時間になって飛行機に乗れば、それですべてのことは終わりになる。本当にすべてが終わる。長い歳月をひたすら1つの目標に向かって走ってきた。それがまさに終わりを告げようとしているのだ。

走り続けてきた15年の歳月、待ち続けてきた15年の歳月。歯を食いしばり、目をむいてきた15年、寝ても覚めても立っても座っても、ひたすら一念に耐えてきた15年、その15年が終わるのだ。

21歳で結婚、幸せな日々の連続であったが、26歳のある日、夫は5歳の娘を連れて姿を消した。そして、今40代になった女、金<sup>キム</sup>ウンエ。苦しみながらも休む時間さえなかった。誰かが慰めようとするのではないだろうか、友達や隣人たちからお祈りに誘われるのではないだろうかと思い悩み、お寺も教会も遠ざけて、いかに身を潜めてきたか。心が折れてしまうのではないか、ある朝、またはある瞬間、突然一気に心が崩れてしまうのではないか、と思いながらウンエが見守っ

てきた、たった1つの思い、それは復讐、まさにそれであった。夫を破滅させてから娘を探し、そして救うことだった。

毎年、娘の誕生日には彼女は一番良い真珠玉を1粒ずつ買った。1粒ずつ増える真珠玉を弄りまわしながら、会えるんだわと、何回も心のなかで呟いた。

真珠は彼女の涙の結晶であった。真珠は彼女の辛苦の抛りどころであった。初めて宝石店に入ったとき、店長はそんなに高いものを買おうとする古びた装いの客に対して疑惑の視線を隠さなかったが、今は毎年同じ日に必ず店に現れ、前よりもっと良い真珠玉を買おうと心を尽くす彼女を理解してくれるようになった。

「娘の誕生日です。娘が嫁入りする日、ネックレスを作ってあげるつもりです。」という言葉とともに、その真珠玉が12個になる日、「来年には中学生になるのでしょうか。」と店長が言った。

「中学生ですって？ いや、あの子はもう17歳になるんです。」

「そうでしたか。可愛いお嬢さんになったのでしょうかね……。」

「可愛いお嬢さん、はい。可愛い歳ですね。店長さん、あの子は今遠いところに住んでいます。」

その言葉が終わった瞬間、ウンエはハッとした。今まで誰にも言ったことのなかった言葉であった。もし娘の話をして、不吉なことでも起こるのではないかと思ったからだ。彼女は誠意を尽くす気持ちで娘のために真珠を用意してきたのだ。だから、もう娘の話をしても良いだろうと思ったのだった。

「失礼しました。お客さん、私が余計なことを言って……。」

「いいえ、来年には会えると思います。」

「ああ、それでは？」

「ええ、遠い外国に行くんです。やっと思行けるようになったんですけど。」

明るい笑みを浮かべた。

そうだった真珠玉。あの子の誕生日ごとにも買ったその真珠が今も彼女のハンドバッグの中にしまっている。

——真珠を持って帰るなんて、そのまま上げてしまえばいいものを。いや、そういうわけにはいかない、あの子はもう私の娘じゃない。一目で分かったが、もう既に私の娘とは言えない。——

1度も手に触ることもできず、あの子の前で思う存分すすり泣くこともできず、離れて帰るしかなかった。あの子は完全に他人になっていたのだ。上半身がほとんど露わになった服を着て、ガムをくちゃくちゃ噛みながら、ブラジルの男性と一緒に姿を現した。男の子は大声で何とか喋り散らしながら、娘を抱き、濃いキスをしたあと、こっちを見ようともせず行ってしまった。ウンエは顔向けができなく、一緒に行った韓<sup>ハン</sup>領事を真っ直ぐに見ることもできなかった。

韓領事がいくつかポルトガル語で話すと、あの子は非常に驚いた表情になった。しかしそれもほんのわずかに過ぎなかった。早口で何かを喋り続けた後、暫く無言で彼女を見つめていた。

悲しい眼差しではなかった。全く違う眼差しだった。

驚いた、有り得ないという表情で見つめながら、今度は再び何かを喋り続けながらゆっくりと迷う表情になった。

「おばさん、あの一、この子は……。」

韓領事は何を話せば良いのか困った表情でこう話した。

「少し、衝撃を受けたようです。今は何も話したくないと言ってるんです。長い間、母について考えたことが無いんだそうです。明日、私に電話すると言っていましたから……。」

それからちょうど、10日が過ぎた。暗黒の10日間。

ウンエは、毎日学校の前に行った。登校する娘と学校が終わって下校する娘を見つめていたのだ。何の暗い影もない明るい表情で娘は男子学生とともに、からからと笑っていた。ブラジルの女子学生よりも騒ぎ立てていた。服装もそうだったが、身振りも笑う声もそうだった。

あの子の周りには何時も3、4人の男の子が集まっていたが、彼女にはやはりならず者のように見えた。

見れば見るほどあの子は見ず知らずの他人になって、どの家の娘なのか情けないような、そんな子に見えるのだった。

——あの子はナンイじゃない。違う！ 私の娘じゃない。——

消えてゆく娘を見つめながら彼女は毎日同じ言葉を呟いたのだった。夫を破滅させようとしたことにこんなしっぺ返しをされるとは夢にも思わなかった。娘を本当に永遠に奪われてしまったという実感、その確認のためにブラジルまで来たのだろうか？

ブラジル。

ウンエにとってブラジルはひたすら自分の手によって、暗い奈落の底に落ちるべき夫の生きている地、それ以上の意味は一つも無い所だった。そして自分がこの地から娘のナンイを救わなければならない最果ての地だったのだ。ところが、娘は救わなければならない存在ではなかったし、既に彼女自身も育ての母でも産みの母でもないのだった。もう夫に対する憎悪さえ起こらなかった。彼女は漸く運命の重さに真っ直ぐ向き合い、認識してしまった現実だけ残っているのが分かった。もう体をぶるぶる震わせる怨恨も自分自身を責め苛む感情も起こらなかった。いかなる試練にも怖がらず勝てるぞというすごい剣幕にもならなかった。一瞬、旋風に巻き込まれすべてが消えてしまったあのような静寂。

そういう現実に対する認識をもとに、漸く彼女は帰国を考えた。否応なく帰国したくなった。すぐに帰って、故郷の父母のお墓の前、陽射しの良い所で横になりたかった。

「ミスター韓、私です。明日帰ります。」

自分の淡々たる声に自分でも驚いたウンエは、電話を切り暗い部屋で、1人で泣いた。暫くの間すすり泣いた。

涙は川の水のように流れ続けた。夫に会ったときさえ流さなかった

涙、死の直前に病床についている夫に会っても出なかった涙であった。

虚無の涙も、悔し涙も、憐憫の涙も一切なかった。

「ウンエ、ウンエ。」

夫は彼女を見て、2回名前を呼んだあと、眼を閉じてしまった。閉じた眼からは暫くの間、涙が流れた。げっそりと落ち込んだ頬を呆然と見下ろしていた彼女は外から聞こえてくるサンバのリズムを聞いて、我に返った。

——なぜ、何も感じないの！　すべてはどこに行ってしまったのだろう！——

自分の中で長い間、重ね肥やしてきた憎しみの結晶のような言葉、怨念のこもった言葉は一体どこに行ってしまったのだろう。衝撃も呪詛も探しようのない空っぽの心。ウンエは自分が拘わっていたすべてが幻だったのに気がついた。その幻さえも燃え尽きてしまい、灰も、跡も、すっかり虚空に消え去ってしまったのを発見した。

ウンエは呆然と白い壁を見つめるしかなかった。やがて夫は目を覚まして静かに話しはじめた。声は少しずつ言葉になり意味を含み始めた。

「あなたが来るのを知っていた。夢で見たんだ。あなたに会ったんだから、もう死んでもこの世に遺恨はない。このようにあなたを来させたのをみると、神様は俺を許すんだろうね。」

骨しか残っていない長指が、するすると彼女に向かって近づいてくると思ったら、突然止まってしまった。

「ナンイに会いたいだよ。」と彼女が発した言葉によって。

「あの子、初めは随分泣いたよ。俺も一緒に泣いたりしていた。そうすれば後は泣かないんだ。ママはどこにいる？　ママはどこなの？

ブラジル人の乳母はそれが何の意味か知らないからあの子を寝かせるたんびに言ってたんだよ。歌うように……。乳母は良い女だった

が3年前、故郷に帰ってしまった。ここから1時間くらい離れた所……、結局ナンイも付いて行ったのだ。10年も一緒に住んでいたから……。

俺は止められなかった。あの子は既に大人だったのさ。それからあの子は俺を、俺を……ナンイは俺と言葉を交わさなくなってもう5年にもなるよ。」

彼はゆっくり渾身の力を注いで住所を書いてくれた。そこにはナンイという名前の代わりにルシアナと書かれていた。

ウンエが紙切れを受け取りそのまま病室を出ると、廊下に座っていた1人の女性が立ち上がった。ウンエは彼女が誰なのか一目で分かった。

「ナンイのお母さん……。」

「……。」

暫くの間、2人の女は顔を向かい合わせて立ったままであった。ウンエは自分の心のなかに何の憎しみも残っていないのが不思議だと思った。年上のようで、柔かい目つきや丸い顔が好感を抱かせるそんな印象だった。

——この女は自分の人生がもっと大事だったはず、この女を責める訳にはいかないのだ——

ウンエの心のなかにはそんな思いさえ起こった。

一度も会ったことの無い女、だが自分よりも先に夫に会い、既に自分より先に結婚し、何年間も結婚生活を続け、戸籍上も正妻であるどころか、ナンイの母親になっている女。ウンエがこういう事実をさぐり出したときは、既に夫が娘を連れて消えてしまっで一か月が過ぎたあとであった。

その事実のあまりの衝撃で洞（町）<sup>ドン</sup>の役所で気を失って倒れた。意識を取り戻したとき、初めて聞こえてきた声は——人でなし、許せんヤツだ。ブラジルに行ってしまったと？ 何にも知らずに実に可愛そ

うな女だ。ヤツを打ち殺してやろう。――

ウンエは再び奈落のような闇の中に落ち込みながら、決して目が覚めないように願った。しかし確かに生气は戻ってきたし、ウンエは家へ帰ってきたのだ。

命が長くないのを自ら知っていたウンエの老母は、急いで花婿を探し始めた。金持ちの寡婦の一人娘ウンエは「年齢も身分も相応しい」男に大学2年のとき嫁入りした。それから2年後、老母は世を去り、天涯の孤児になったウンエは本当に年齢も相応しく、身分も相応しい夫だけを頼りに更に3年暮らした後、自分が戸籍上は結婚したことも無ければ娘を産んだことも無いことになり、それから泰山のような存在だった夫が、娘を連れてブラジルに移民してしまうという惨憺たる運命に向かわなければならなかった。

毎日、毎日空港へ行った。

世間の常識を何も知らないウンエは偉い身分に見える人なら、誰でも引き止めブラジルに行くようにと無理を言った。ブラジルはもちろん、南米に行く人々を捜し求めながら夫の名前を話し自分の住所を書いて手渡すことを1日も欠かさずに毎日やった。そうするうちに女学校時代の同窓生に会い、彼女の助けで理性的な生活を取り戻した。そのときから復讐を心に誓った生活を始めた。ただの一瞬間も夫と娘の映像から自由になったことは無かった。到る所で夫に会い、娘と会った。少しでも似ている他人の後をついて行ったことも何回もあった。

――ブラジルへの移民は嘘かも知れない。本当に。――こう泣き叫びながらバスから降りて、今過ぎ去った歩道を歩いて来る夫の姿に似た人を探して、あたふた走っていったことも少なくなかった。そうする度にウンエは、夫を破滅に追い込もうと更に恐ろしい計画を立てたりした。それは彼女に財産を貯めさせるきっかけになったのだ。彼女



は食べず、着ずにひたすら貯蓄するために仕事を続けた。

「15年間、一刻もあのヤンバン（訳註・婦人が第三者に対して自分の夫を指して言う語）はナンイのお母さんを忘れたことがなかったんです。それこそ私だけがよく知っています。ヤンバンはひたすら仕事だけに没頭したし、忘れようと熱中した仕事によって金が入ったんです。僑民のなかでは指折りの金持ちになったんです。大金持ちでした。1銭も使わずに終始儲けるだけで、僑胞のためにも1銭も使わなかったんです。わざと他人から悪口を言われようとしているかのようにも見えました。常に孤独で寂しがっていたし、苦しみ……、ここでは笑わない人として通っています。ヤンバンが最も喜んだときがありましたが、それは病院から肺癌を宣告されたときでした。更に大きい苦しみに襲われながら死んで行ければ良い、と言いました。」

「……。」

「ナンイのお母さん、私には子供がないんです。罪の代価として出来るだけナンイを立派に育てようと思いました。結局はあの子を乳母に奪われてしまいました……。もっぱら乳母だけを頼りにし、食べ物、勉強……、だんだん我が儘を言うようになり、私に対して口をつぐんで話さないという反抗をしました。幸いに乳母がおとなしかったので……。乳母が連れて行ったんです。我々があの子に会えなくなってから、既に3年目になります。会いに行こうとしても断られ、会ってくれないのです。乳母の家が貧しいこともあって、何とか金銭的な援助だけは受け取りますが、それも最小限のお金です。おとなしい乳母もあの子に対して限界を感じたのか、放任しているらしく、遠くから見る度に、あの子が悪くなりそうな気がして堪らないんです。ナンイのお母さん、ヤンバンも臨終まで長くないし、たった1度だけでも会わせてやりたいんです。言って下さい。私1人の欲心のためヤンバンがなめる苦しみ、ナンイのお母さんのなめる苦痛、それから気の毒なナ

ンイ……。どうすれば……。」

彼女は嗚咽しながら椅子に崩れ落ちた。ウンエはそのまま背を向けて病院を出た。

自分とはすべてが縁のないものであるかのように、帰り道自分の胸に吹きすさぶ風の音を聞いた。寂しい風、冷たい風が暫くの間吹いて行った。やがて風は1つの考えをもたらした。

長い時間が自分より更に彼らを虐待したこと。

実はこの地に着いたとたんに関の弟の領事を訪ね、夫の足どりが分かったとき、夫が死の使者と接近し今日明日の命と聞いて、ウンエは不意打ちを食らった感じがした。運命の神様が自分に対しては特に苛酷だと思ったからであった。破滅へ向かわせ苦しみに落ち込ませ、ゆっくりと殺してやろうと長い間いかに悩み苦しんだか。しかし運命は一步先に到着し、夫を捕らえてしまったのだ。容赦なく罰する彼女の鞭の前に立って遮っているのだ。そして彼のために最も穏やかな完全な終末を設けてくれたのだった。

——有り得ない。到底有り得ない。——

ウンエはホテルの部屋に3日間閉じこもった。人生の方向感覚を失ってしまったのだ。苦しみながら立てた計画は無に帰してしまい、ただ方向性を失って迷うだけであった。混沌の3日間が過ぎた後、ウンエはホテルから出た。結局、会おうとした誘惑を乗り越えられなかったばかりか、ナンイの居所を他に探る方法も無かったからだ。

——心安らかに死にたい？ 私が彼を助け心安らかに死なせるわけ？——

運命がニヤニヤ自分に向かって笑っているようだった。しかしそれも気づかず、すべてを振り捨てて急いで娘を探したのに……。そうだったのに……。そこにさえ運命は先回りして母と娘の間に立ち塞がるとは。

言語の障壁。

これはウンエの立場では全く予想外のことであった。考えてみればごく当然なことにもかかわらず、なぜそれにたった1度も思い当たらなかったのか。

——愚かな私。——

嘆きの声が不意に彼女に聞こえてきた。

それから10日が過ぎたが、ナンイからは何の連絡もなかった。彼女は自分の運命と対面することになって漸く穏やかな気分が変わった。それから思い付いて話しておいた帰国が決定したことも淡々と受け入れた。今までは運命と真っ直ぐに向き合い、怒りに満ちた眼と声で泣き叫んだりしていた。もう離れる国、離れる所、離れる部屋でウンエは運命が自分に近づいてき、声をかけ慰めてくれるような気がした。

——もう、休まなくちゃ、ね？ ウンエ？ 休むようにしてね。君はあまりにも無理したんだ。疲れ切っているだろう？——

——そうなの、疲れてる。手に入れたものは何一つ無いのにただ疲れただけなの。——

——何がほしいの？ 一体、何が掴みたいの？——

——分からない。もう何がなんだかさっぱり分からなくなったんだから。——

——そうなんだ、すべてがそうなんだよ。つまり掴んだと思って手を開けてみると、何もないんだ。分からないのは誰だって同じさ。だから、休むんだ。——

——休んだら何が変わるの？——

——ただ、休むだけだ。——

——私が休むと、ナンイは、私のナンイは……——

——だから、そのナンイに対する考えを休むんだよ。——

——いや、それだけは……——

——……。——

ウンエは運命の返事が無いなかで自分の「いや」という叫びが小さくなっていくのに気がついた。

——仕方ないですよね、もう私はどうしようもないでしょうね？——

——……。——

空港は少しずつ騒がしくなった。旅行社の社員が手続きを終えたとき、韓領事が近づいてきた。

「ミスター韓、これまでいろいろと有難うございました。ソウルに來た際は必ず連絡をして下さいね。」

落ち着いて余裕を感じられる言葉を自分で発しながら、ウンエは寂しく笑った。広場の一角で恋人同士らしい若い男女が抱き合あって泣いているのを見た彼女は、2人が不幸にならないよう祈るほど余裕を取り戻していた。

——近いうちにきっと会えるだろう。なぜ2人は離れなければいけないのだろう。そう、誰でも離れてはいけないのに。——

「もう少し滞在しながら待つのもいいかと……。とにかく娘さんに会わなければいけないでしょう？」

「連絡が無いでしょう？」

「いいえ、必ず連絡すると言っていました。」

「言葉だけでしょう？ お互い言葉も通じなかったし……そのことを考えなかったのが間違いだったわ。いずれにせよ、ミスター韓が続けて関心を持って見守って下さい。あの子も母親が活着ていることを確認したはず、何か考えがあるのでしょうか。私はもう疲れ切って、帰って暫くは考えを整理したいし……。」

「娘さんは私が何とかしてみます。ショックが大きかったし、特に気ままに暮らしていたこともあって、今どうしていいか見当がつかないのでしょう。さあ一、まだ時間が残ってますからコーヒーでも1杯飲みましょうよ。」

その瞬間、いきなりウンエは、自分の前に誰かが立ち塞がるのを感じた。

ナンイだった。太ったブラジル女性と一緒にだった。ウンエは暫く呼吸を整えた。くらっと目まいがしたからだった。ウンエはゆっくり椅子に座った。それから冷静にナンイの顔を見上げた。かなり背が高いと思われた。近くで見るとまだあどけない顔だった。

注意深くただ見下ろし続けていたナンイは何も言わずに近づいてきてウンエの眼鏡をゆっくり外した。それからウンエの前にひざまずいて顔をじっと見つめ始めた。暫くの間、目を見つめ、額を見つめ、唇を見つめ、頬を見つめた。何かを思い出すように探るように。

——ああ！ そうだ。この子は母の面影を探っているのだ。——

ウンエは素早く結わえてあった髪を解いた。昔のように長い髪が肩を覆うと、ナンイはそっと近づいてきて、ウンエの膝に顔を伏せた。そして小声だがはっきりと言った。

「私のお母さん。」

ウンエは気が遠くなりそうになった。深いどん底に限りなく落ち込んでいく、あの夢の感じを思い出した。ところがそれは深くて暗いどん底ではなく自分が高い雲に乗って、あの遠い空を飛んでいるような不確かさであった。ふわふわした雲の上で娘に抱かれて飛んでいると感じた瞬間、今度は娘が少しずつ自分の体のなかに入ってくるのが感じられた。これほど大きな体ならどんなものでもすべて受け入れられそうであったし、どんなものでも撫でられそうであった。闇のなかでニヤニヤ笑い続けている運命という存在まで抱きあげたい気分になった。

——こっちに来てよ。もう私のために気遣わないで。私のところに来て休むんだよ。もうそんなに先立って走り回らなくてもいいんだから。疲れてるでしょう？——

涙の向こうで乳母が両手を開いて近づいてくるのを見ながら、ウンエはまた再びフッと浮き上がるのを感じた。

## 註

アン・ギョンジャ氏は、ブラジル在住の韓国人文学者の代表的な存在で、自らが主宰していた『熱帯文化』を中心に韓国語による詩、小説などの文学活動を行ってきた。戦後（解放後）にブラジルに移民してきた韓国人は、数万人に及ぶが、韓国語による文学創作活動は、それほど盛んではなかった。ブラジルにおける日系人社会が、複数の日本語新聞、印刷所、出版社を持っていたようには、韓国系人社会は、そうした文化的インフラを持たず、『熱帯文化』も最初は活版ではなく、タイプ版印刷で製作された同人誌だった（表紙だけは韓国でオフセット印刷したという）。医者、新聞社特派員、教員、商店経営者の傍ら文学活動を趣味とする人たちが集まったグループであり、詩集や自伝以外には、本格的な単行本となっている作品は少ない。

ここに訳出したアン氏の短篇小説「邂逅」は、母親から引き離され、ブラジルに父親に連れられ、移住した娘に、韓国からその母親が会うために訪伯するが、娘は韓国語を忘れ、すっかりブラジル人と化していたという“悲劇”をテーマとしたものである。韓国系移民社会の1つの側面を示したものとして興味深いものがある。『熱帯文化』に発表され、韓国国内でも秀作として評価された。2010年8月に、記者たち3人がサンパウロにアン氏を訪ねた折、同作品の翻訳の許可をいただいたことと、様々な興味深いお話をうかがったことに対して感謝の意を表したい。なお、この翻訳とブラジル現地調査は、法政大学の競争的研究資金援助プログラムの支援によって行われたことを付記する。（川村記）